

Living the Lotus 6

Buddhism in Everyday Life

2025
VOL. 237



こころひとつに笑顔で行進
2025年北カリフォルニア桜祭りに北米会員が集結



Living the Lotus
Vol. 237 (June 2025)

【発行】立正佼成会 国際伝道部
〒166-8537

東京都杉並区和田2-7-1 普門メディアセンター3F
Tel: 03-5341-1124 Fax: 03-5341-1224

E-mail: iiving.the.lotus.rk-international@kosei-kai.or.jp

編集責任者: 赤川 恵一

編集チーフ: 三川 紗知

校閲者: 小坂 和正、菊池 克之

編集スタッフ: 国際伝道部スタッフ

立正佼成会は1938年に庭野日敬開祖、長沼妙佼協祖によって創立された、法華三部経を所依の經典とする在家仏教教団です。家庭や職場、地域社会の中で釈尊の教えを生き、平和な世界を築いていきたいと願う人々の集まりです。現在は庭野日鏡会長とともに、私たち会員は仏教徒として布教伝道に励みながら、宗教界をはじめ各界の人々と手をたずさえ、国内外でさまざまな平和活動に取り組んでいます。

Living the Lotus—Buddhism in Everyday Life (法華経を生きる～生活の中の仏教) というタイトルには、日々の生活のなかに法華経の教えを活かして、泥水に咲く美しい蓮の花のように、人生を豊かに、そしてより価値あるものにしていきたいとの願いが込められています。本誌を通じて、世界中の人々に日々の生活のなかで活かす仏教の教えをお伝えします。

「親孝行」とは何か

庭野日鑑
立正佼成会会長



人を憎まず、争わず

「親孝行したいときには親はなし。さればとて石（墓）に布団は着せられぬ」という諺ことわざがあります。親が元気なうちに孝行すればよかった、と悔くいる心情がありありと感じられて、「ほんとうにそのとおり」とうなづく方も多いことでしょう。ただ、「石に布団は着せられぬ」とはいえ、何もできない、する必要がないということではないと思うのです。

先月お話ししたとおり、宇宙の誕生にまでつながる壮大な命の歴史のなかで、何一つ欠けることなく結ばれた縁、そして命のバトンリレーによっていまを生きる私たちにとって、「親孝行とは何か」を考えることは、親や先祖をとおして自分の命の根源を見つめ、未来に向けていま、自分に何ができるかを問うことでもあるからです。

また、「孝行」の「孝」の字は「老ろう」と「子し」の組み合わせによる文字で、これは年長者から若い人への「連続」が断絶せず、大切なことが継承されて一つに結ばれる「統一」を示すそうですから、親孝行が両親に孝養こうようを尽くすこと以上に深い意味と内容を含んでいるのは間違いなさそうです。

それでも『論語』では、「孝とはどういうことか」と尋ねられた孔子が、「父母はただ、その疾やまいをこれ憂うれう」（親はなにごとにつけ子どもの身を案ずるものだから、身を慎つつしんで父母に心配をかけないように）と、わかりやすい答こたえを返しています。むろんこれも大事なことです。ただ、この「疾」の字義を調べてみると、

「疾」には「やまい」のほかに「憎む、妬む、恨む、苦しめる」などの意味があり、安岡正篤師の調べによれば「疾は争うに同じ」ともあるそうです。

ですから、親子はもちろんあらゆる人間関係において、我欲や争いによる断絶がないよう身を慎むこと、それが日ごろ私たちにできる親孝行の一つでありましょう。

親不孝という殺生

貧しい人の救済や治水を行なって、人びとから菩薩と敬われた行基の歌に、「山鳥のほろほろと鳴く声きけば父かと思ふ母かと思ふ」があります。亡き父母を慕う気持ちがあふれ、山鳥の鳴き声さえ懐かしい父母からの呼びかけに聞こえる……その思いの切なさに胸を突かれる一首です。

ところが、私たちはときにこうした感傷に浸るいっぽうで、ともすると生んでくださった親への感謝を忘れ、容姿を嘆いたり、思うにまかせない人生を恨んだりしがちです。それはしかし、授かった命に感謝できない親不孝でもあって、曹洞宗の余語翠巖師はそれを「不殺生戒をおかすことになる」といわれます。余語師は「天地いっばいの命」をそのままに生きる私たち、つまり仏性そのものである私たちの人生は、別け隔てなくいずれもすばらしく、意義のない人生も意味のない存在もこの世には一つもないと断言されます。その自分や自分の人生に「是非をつける」ことは、根源の命を顧みない殺生、つまり在家の仏教徒が保つべき五戒の一つである不殺生戒をおかすことだということです。

その意味では、怒りや不満といった自我むきだしの心をできるだけ抑えて人と争わず、仏性そのものの自分を信じて、ものごとを仏（真理）のはたらきのまま素直に受けとめることが、私たちにとっての親孝行となります。また、人間を含む大自然の営みは、休むことのない進歩・向上と創造を原則としますから、自分の成長とともに次代を担う「人を植える」ことも重要な責務で、それも過去から未来へとつづく命の連鎖に向けた親孝行といえると思うのです。

そして、その鍵となるのは「忠恕」という、これまでの話を包含する心と姿勢です。恕す、受け容れる、まごころを尽くす、思いやる——これらを日々、実践するなかに、真に大切な大和の精神の広がりや継承があるのです。

(『佼成』2025年6月号)



Spiritual Journey

仏さまの教えに照らされて、一人でも多くのひとの力になりたい

モンゴル・エルデネット法座 グルゴー・ミヤダグマー

この体験説法は、2025年3月15日に大聖堂で行なわれた釈迦牟尼仏ご命日(布薩の日)式典で発表されたものです。

皆さま、お願い致します。

私は1958年に10人きょうだいの長女として産んでいただきました。両親が駅舎に勤めていた関係で、わが家は地方の駅を転々とする生活を送っていました。両親は朝早くから夜遅くまで働いておりましたので、私は両親の代わりに妹や弟の世話や家事に追われながらも、賑やかな家庭の中で幸せな毎日を送っていました。妹や弟が多かったこともあり、子供と関わる仕事がしたくて、将来は学校の先生か小児科医になるのがいつしか私の夢になっておりました。

父は見返りを求めず、進んで人さまの世話をする人でした。母はいつも食べ物を人さまに施す思いやりの深い人でした。父は重病を患い、45歳の若さで亡くなりました。母は現在87歳ですが、今でも子や孫たちにモンゴルの民族衣装を縫ってあげられるほど元気です。一昨年、母の85歳の誕生日をお祝いした時には、父と母の2人から始まった家族は108人の大家族になっていました。

私は1982年にモンゴルの首都ウランバートル市にある国立医科大学を卒業し、夢だった小児科医になりました。その後、夫と出会い、1985年には長女、1989年には長男を授かりました。しかし、夫とは考え方や価値観が合わず、やがて夫から暴力を振るわれるようになりました。結婚から七年



家族で撮った記念写真(1991年頃、中段右端がミヤダグマーさん)



大聖堂で説法をするミヤダグマーさん

後、私は夫から逃げるように離婚し、子供を連れて、モンゴルで2番目の大都市であるエルデネット市へ移り、地域医療センターの医師として働くことになりました。

そこで私は新たな出会いを得て再婚しました。夫は優しく、面倒見のよい人で、二人の子供にとって良き父親でした。穏やかな日々の中で、至福の時を過ごしていました。

ちょうどその頃、知り合いから不動産ビジネスの話を持ちかけられました。子供の将来のためにはより多くのお金が必要だと思い、借金をしてこの話に乗ることにしました。ところが、いざ始めてみるとビジネスは一向に思い通りにいかず、やがて知り合いに騙されていたことが分かり、愕然としました。しかもその矢先の2005年に、夫が病気で亡くなった

Spiritual Journey

のです。二人の子供を育てながら借金を返済するという困難を、私は一人で背負わざるを得なくなり、幸せの絶頂から一気に谷底へ突き落とされたような気持ちでした。

夫が亡くなって間もなく、のちに導きの親となるエンフトヤーさんからモンゴル立正佼成会のことをお聞きました。モンゴル語で読経をされていて、自然を大切にすること、親孝行をすること、人を思いやることを教えている団体だと知りました。そのことが心に残り、いつか訪ねてみたいと思いました。2006年、実際にウランバートルのモンゴル立正佼成会を訪ねる機会がやってきました。そこはアパートの一室で、現在支部長を務めるゾリグマーさんをはじめ、五人の女性がモンゴル語でご供養をあげていました。私もご供養に参加すると、無量義経十功德品第三の「十悪を行ずる者には十善の心を起さしめ」の一節が目にとまりました。当時の私は借金の返済に追われ、子育てもままならず、自責の念に駆られていました。そんな私でも「こうした聖なる経典を毎日読誦すれば心が清まるのだ」、さらには「心の汚れのない子供たちが小さいうちから読み続けていればどんなによいだろうか」と思いました。ご供養後の法座では、エルデネットの子供たちにもこの経典を読誦してもらいたいとお話しました。

その2か月後、ゾリグマー支部長さんをはじめ五人の会員さんが220km離れたエルデネットまで布教に来てくださいました。私は職場の一室で、近所の知り合い6人とその子供たち20人と一緒に、ご法の話をお聞かせいただきました。その後、わが家に総戒名が勧請され、ご安置のご供養には一緒にご法の話をお聞いたご縁のある子供たちや大人たちも参加してくれました。ゾリグマー支部長さんから「21日間欠かさずご供養をすれば願いが叶いますよ」とご指導をいただき、わが家で毎日夜の七時から皆でご供養をさせて



自宅でのご供養に参加した人たちと(最後列左から3番目がミヤダグマーさん)



2018年、エルデネット法座入仏式の参加者と(前列左から4番目がミヤダグマーさん)

いただきました。ご供養をすれば願いが叶うという言葉が強く印象に残り、皆で一生懸命ご供養をあげました。それは私たちの心をご法に向かわせるための方便でしたが、新しい参加者が続々と加わり、最後の参加者が21日間のご供養を終えたのは三か月後のことでした。参加者の皆さんの心が清まり、法座では「離婚寸前だった夫婦が仲直りした」「酒好きの夫がお酒を飲まなくなった」など、生活の中の嬉しい変化や功德を分かち合いました。こうして、わが家を拠点にしたエルデネット法座の活動は3年間続きました。

私自身もご供養を通して思いがけない功德をいただきました。私は離婚した最初の夫をずっと憎んでいました。しかし、教えのおかげさまで自分自身や夫のことを改めて見つめ直し、夫とは出会うべくして出会ったのだと見方が変わりました。振り返ってみると、夫と出会う前は私自身も周りの人たちを傷つけ、悲しませる行動をとっていたことに気づきました。仏さまがそんな自分に気づかせるために夫と出会うさせてくださったのだと思いました。このように受けとめると、長い年月ずっと私から憎まれていた夫は本当にかわいそうで、申し訳なく思いました。見方が変わることで心まで変わることを深く実感しました。

2008年には主任のお役を拝命しました。有り難いことにエルデネットの会員数は増加の一途をたどり、市の中心部にあるアパートの一室を法座所として賃借し、活動するようになりました。私は毎週ワクワクする気持ちで法座所へ出かけ、信者さんたちとご供養をあげ、教えを学び合いました。家族や友人、同僚たちをお導きさせていただき、サンガの輪は地方にも広がりました。いま導きの子は240人を数えます。佼成会と出会い、私の人生は一変しました。ご供養をあげ、教えを学べば学ぶほど、人生に起こる出来事はすべて私を向上させるための仏さまのお慈悲であると受け

Spiritual Journey



2018年、エルデネット法座入仏式のあとで(左から齋藤伝道部長、ミヤダグマーさん、廣瀬国際伝道部次長)

とめられるようになりました。

しかし、そのような心に至るまでには、もう一つ試練を乗り越える必要がありました。2014年に孫が生まれ、私は孫の世話をするため一時的にウランバートルで生活することになり、エルデネット法座所のことを導きの子のAさんに託しました。ところが一年後、法座所を訪ねると、そのAさんが私の代わりに主任になっていたのです。私に相談もなく、いつの間にか決められていたことに大きなショックを受けました。法座所発足時から一生懸命頑張ってきたのに、なぜ私には何の相談もなかったのかと寂しく感じました。ひどく落ち込み、教えに対する気持ちも冷めてしまい、ご供養も喜んできなくなりました。そうした状態が3年ほど続き、心はいつも不安定で、悲しい気持ちが晴れることはありませんでした。

そんなある日、懺悔経を読誦していると、こうなった原因は自分にあるのではないかとの思いがふと頭の中をよぎりました。そうして自分自身を振り返ると、私の中に「エルデネット法座所をつくったのは自分だ」という傲慢な心があったことに気づきました。その時、私の苦の原因は「自分は誰よりも頑張っている」「正しいのは私で、間違っているのは相手の方」という自己中心の心にあったことに気づかせていただきました。すると、「十悪を行ずる者には十善の心を起さしめ」の经文のごとく、この苦しみの原因は傲慢な自分を教化してくださる仏さまの大きなお慈悲だったのではないかと思えたのです。仏さまの計らいに気づけたとき、身体全体で喜びを実感し、すべてが光り輝いて見えました。すぐに法座所を参拝し、法座で自分が心得違いをしていたことを懺悔させていただきました。そんな私を温かく迎え、受けとめてくださった信者さんたちに心から感謝しています。

2018年にエルデネット法座所は正式に本部に登録され、

当時の齋藤高市国際伝道部長さん、廣瀬幾世国際伝道部次長さんがエルデネット法座所にお越しになり、ご本尊入仏式が行なわれました。式典後、廣瀬次長さんに教師資格を拝受するように背中を押していただき、私はありがたく自分のお役に邁進することを決心しました。このように、自分の至らなさに気づき懺悔すると、仏さまから思いもよらないプレゼントをいただいたのです。

2020年に私は肝臓がんと診断されました。しかし診断結果を聞いても不思議と恐怖を感じませんでした。肝臓の四か所にがんが発見され、肝臓の大部分を切除する大きな手術をしなければならないとのことでした。その時、サンガの皆さんが一か月間三部経を読誦し、念じてくださいました。サンガの温かさに励まされ、おかげさまで「この困難を乗り越え、長生きをして今後も多くの人に教えを広めたい」と強く願うようになりました。2021年と2023年にもがんが再発して手術を受けました。そのたび毎にご法のおかげさまで心穏やかに乗り越えることができました。最近また再発して手術を受けました。それでも恐れることはありませんし、心配することもありません。もし教えに出会っていなければ、私は医師として手術や治療のことだけに気をとられ、がんを悪化させていたかもしれません。しかし、いまでは、これまでの苦しみのおかげさまで、すべてを穏やかに受けとめることができるようになりました。

いま私には夢があります。それは一人でも多くの人の方になりたいというものです。そのために少しでも長生きをしたいと思っています。そして、コロナ禍で停滞してしまったエルデネット法座所の活動が再び活発になるように、皆が健康で心の安らぎを得られるように、これからも布教に一生懸命精進させていただきます。

皆さま、ありがとうございました。

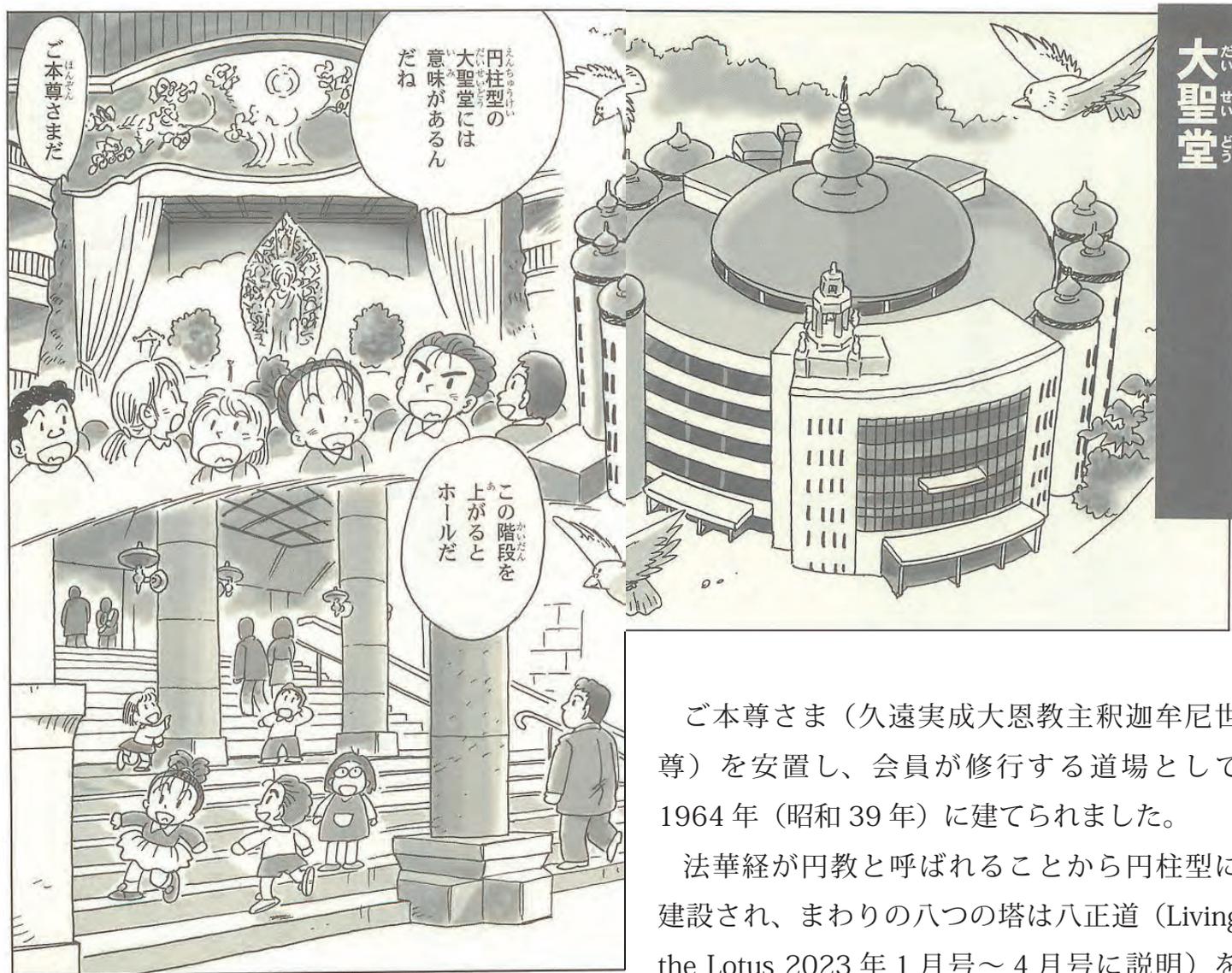


2018年、教師授与式に参加したモンゴルの拝受者(左から2番目がミヤダグマーさん)

まんが立正佼成会入門

立正佼成会の施設

大聖堂



ご本尊さま（久遠実成大恩教主釈迦牟尼世尊）を安置し、会員が修行する道場として1964年（昭和39年）に建てられました。

法華経が円教と呼ばれることから円柱型に建設され、まわりの八つの塔は八正道（Living the Lotus 2023年1月号～4月号に説明）をあらわしています。4階はご本尊さまが安置されているホール、5階から7階は法座席になっています。

2階が食堂、7階には「禅定の間」があります。

2006年（平成18年）、免震工事がほどこされ、リニューアルしました。

豆知識

大聖堂の正面玄関には三点の菩薩像の絵がかかげられている。向かって右から、文殊菩薩、普賢菩薩、弥勒菩薩だ。文殊菩薩は智慧、普賢菩薩は実践・実行、弥勒菩薩は慈悲をあらわす。

※私的使用を除き、無断で複製・転載をしないでください。



立正佼成会発祥の地・修養道場



大聖堂ができるまで本部があった場所を立正佼成会発祥の地・修養道場と呼んでいます。

170坪の土地に、百畳敷の広さを誇る修養道場ができたのは1948年（昭和23年）12月。すべて会員の奉仕でつくられました。開祖さまも土運びなどに汗を流したといひます。

発祥の地には修養道場のほか、開祖さまと脇祖さまの銅像が建ち、脇祖さまの住居だった妙佼殿があります。

豆知識

開祖さまと脇祖さまの銅像は、1987年（昭和62年）に「立正佼成会発祥の地記念碑」が建てられた時に安置された。修養道場を参拝した時には境内を歩き、立正佼成会が創立されたころの様子をしのいでみよう。



嫌いな人を好きになる

「法の子」を育てる

立正佼成会開祖 庭野日敬



これまでは、「相手の言動をどう受けとめるか」という立場から考えてきましたが、自分がもっと大きく高まり、職場や社会も円滑に進歩向上していくためには、もう一歩進んだ考え方が必要でしょう。

というのは、こちらから積極的に親切を尽くす、奉仕をする、助けるといった行ないをとおして、自分と相手のあいだに何ものかを育てていくような、ちょっとした心がけが必要なのです。そうしてお互いが親切にし合い、奉仕し合い、助け合い、育て合っていくと、その働きが響き合って、職場も社会も明るく、あたたかく向上進歩していくのです。

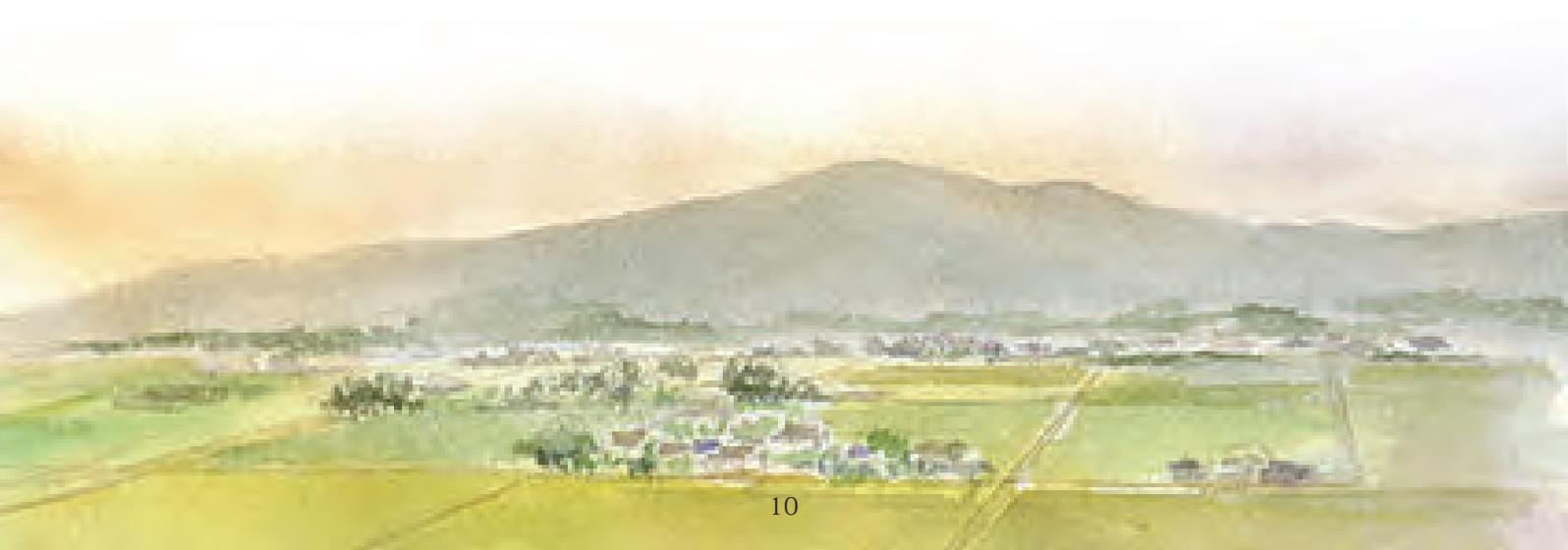
仏教で「布施」を菩薩行の第一にあげているのも、立正佼成会で「一人が一人を導く」ことを目標としているのも、自ら進んで働きかける積極性を重視しているからにほかなりません。

「一人が一人を導く」というのは、つまりは「法の子」を育てることです。子どもが生まれると、親はその子を育てることに心を砕きます。育児の本を読んだり、経験者に話を開いたりして、子どもが健全に育つように懸命になります。「導きの子」を育てるのも同じことです。迷うこともあるでしょうし、そっぽを向かれることもあるでしょう。そうしたいろいろな体験や試行錯誤を乗り越えていくところにお互いの高まりがあり、喜びがあるのです。

人を育てることは、人間にとって大きな喜びの一つでしょう。お互いに切磋琢磨していく関係に目をとめれば、その人は何ものにも代えがたい、ありがたい人になるはずです。

「嫌いな人を好きになる」という問題にしても、自分自身を省みて自分が変わり、相手の真実の相を見、柔らかな心をもつという三つの方法だけでなく、何らかの形で相手に尽くすという積極性が、最後の決め手となるものと信じます。

庭野日敬平成法話集 1 『菩提の萌を発さしむ』P.77-78



離れていてもできる親孝行

国際伝道部長
赤川 恵一

みなさん、こんにちは。6月になり、早くも一年の折り返しの時期を迎えました。季節が春から夏に移り変わる節目となる梅雨入りも、ここ東京ではもう間近に思われます。

さて、今月の会長法話のテーマは「親孝行」です。私にとっては、少々耳の痛いテーマでもあります。というのも、私は秋田の親元を離れて上京し、今年で39年になります。その間、病床にあった父を最期まで看病してくれたのは、長姉とその家族でした。今年90歳の卒寿を迎えた母の世話も、同じく長姉にお願いしています。

母には少し認知症の症状が見られ、かつてはいろいろと苦勞もありましたが、おかげさまで現在は定期検診を受けながら、デイサービスも利用し、在宅で穏やかな老後を過ごしております。

昨年末、父の十三回忌法要のために帰省した際、40代の甥からふとこんなことを言われました。

「お婆ちゃんは、叔父さんから電話があった日は、明らかに様子が違うんだ。何というか、様子が生き活きして、顔つきなんか一日中明るいんだよ。だから、親孝行と思ってちょくちょく電話をもらえたら嬉しいんだけどな。」

気丈な性格の母ではありますが、老いの中で不安や不自由さを抱えていることに、甥の言葉であらためて気づかされました。遠く離れて暮らしている私ですが、母の心に少しでも寄り添い、会長先生がお示しくくださった「忠恕」の実践に、日々心を込めて努めていこうと強く心に誓いました。



4月29日、訪問先の台南教会の会員と
(最前列中央が赤川部長)